

「学名」に皆さんはどのように接しているでしょうか。生物学では論文発表する際には材料の表記に必ず求められます。分類学者でしたら組織的習得が求められますが、そうでない人には単なる符丁として扱われているのではないのでしょうか。筆者も植物分類学の専門家ではありませんのでそのような姿勢になりがちですが、単なる符丁でなく、意味づけを行いその存在に意義を与えようと密かに努めてきました。これまで表立って、表明したことはありませんが、今回はその蓄積を披露したいと思います。

「学名」とは何か

学名がリンネ (Carolus Linnaeus, または Carl von Linné, 1707-1778) (図-1) により定められた生物命名法であることは改めて申す必要はないと思いますが、彼はウプサラ大学教授であって、スウェーデン国王の侍医であり、王侯のごとく振舞っている人であったと伝わっています。花の雌雄器官の差違から植物を24群に分けるという分類体系を提案しましたが、それが多分に人為的な傾向にあることは容易に判断できることでしょう。しかしながら、彼の提案になる二



図-1 リンネ
ネット情報より

命名法は大変優れたもので、有用性のある方式であることには疑いを持ちませんし、種の概念確立は彼の功績です。そして、彼の使徒は世界各地に植物調査に赴きましたが、日本へはツェンペリー (Carl Peter Thunberg, 1743-1828) が来て、日本の植物種の基本を明らかにしました。彼はその途次に南アフリカの植生も明らかにしております (西村 1989)。学名は基本的にラテン語表記で、ヒトが *Homo sapiens* L. と表現されるように、これは命名法の国際委員会で決められ世界共通です。*sapiens* とは「知恵がある」のラテン語の形容詞ですから辞書で知ることができます。ロシア語の文献を見た時でも学名だけはラテン語表記であることを知った時、その世界性を知りました。一方では、その体系は種 (Species), 属 (Genera), 科 (Family), 目 (Order), 綱 (Class), 門 (Phylum), 界 (Kingdom) は、あたかも王国の階梯を示すとはよく言われることです。リンネはラテン語にこだわりを持っており、同時代の植物分類学者で、彼より一層自然分類体系を示していたフランス人アダンソン (Michel Adanson, 1727-1806) が、当時フランスの植民地であったセネガルでサン・テグジュペリの「星の王子様」にも登場するバオバブを発見し、現地名を学名に採用しようとした。リンネはそれに反対し、結局その属名はアダンソンにちなみ *Adansonia* となりました (木村 1983)。ところが、ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1717) が記載したイチョウは *Ginkgo biloba* L. となっておりますが、日本名のイチョウからつけられました。これを認めたのは、リンネはケンペルのことを尊敬していたからであるということで、多分にこれら命名は人の判断に依存しています。なお、イチョウにはその後 *Salisburia adiantifolia* も登場し、シーボルトの日本植物誌にはその名前が登場しますが、やがて消えることとなりました。属名の捉え方は一様には行かないようです。

学名命名の機微にふれたのは、筆者の育った標高 980m 余の地から義務教育学校へ通う通学路の用水路に沿って生えていたツリフネソウ (図-2) を知り、近くの林へ入るとキツリフネ (図-3) を見、庭にハウセンカを見た時です。そ



図-2 ツリフネソウ



図-3 キツリフネ



図-4 キレンゲシヨウマ



図-5 トガクシシヨウマ

れらはいずれも *Impatiens* ですが、英語の *impatience* (短気, 不機嫌) の語源でもあり、ラテン語起原です。意味するところは、熟した種子の莢に触れるとはじけて種子が飛び散ることに由来します。ツリフネソウは東アジアに分布し、ホウセンカはインド起源で園芸植物として広く栽培されています。キツリフネは北半球に広く分布し、*Impatiens noli-tangere* L. ですが、その種小名は「触らないで」を意味するラテン語の形容詞であり、英語の *touch-me-not*, ドイツ語の *Rühr-mich-nicht-an* であることは、意味が重複しています。その命名は実に人間臭いではありませんか。多くの名前がラテン語であればそれを採用し、ギリシャ語も盛んに登場します。ツツジ科の高山植物にヒメシヤクナゲ *Cassiope*

lycopodioides D. Don, イワヒゲ *Andromeda Polyfolia* L. がありますが、いずれもギリシャ神話に登場します。Cassiopeの母が *Andromeda* であり、いずれも匍匐性の形状ですので、連想からつけられたのでしょう。一方では、ジンチョウゲは *Daphne odora* ですが、*Daphne* はギリシャ神話においてはオリーブに変えられますので、ヨーロッパ人がジンチョウゲの果実を見た時、それが赤色であることからオリーブであろうと、早とちりでつけたようです。実際、オリーブの学名は別に定められており *Olea europaea* ですから、この命名に規則性があるようには見えません。以下には、これまでに出くわした数例を羅列します。

「学名」アラカルト

バオバブがアダンソンにちなんで *Adansonia* となったと述べましたが、多くの植物を見ると現地名の名前もしばしば属名に採用されており、リンネが亡くなり、彼の束縛が無くなったからと思われる。日本での植物探索の黎明時代である 1890 年代を舞台とした牧野富太郎博士をモデルとしたテレビドラマ「らんまん」がありましたが、この時期にくつつかの例が見られます。キレンゲシヨウマは四国の石鎚山で矢田部良吉により発見された日本固有の植物ですが、その学名は *Kirengeshoma palmata* Yatabe であり、高らかに日本産を主張していると思います。この植物は現在日光植物園に植えられているので見るができます (図-4)。また、ワサビは松村任三により *Wasabia japonica* Matsu. と定められました。これもその例でしょう。矢田部は東京大学初代植物学教授であり、松村はその後を襲いました。ところが、命名を巡っての抗争もあります。トガクシシヨウマ (図-5) は、当初メギ科 *Podophyllum japonicum* とされますが、その特異性に気付いた伊藤圭介の孫にあたる伊藤篤太郎は江戸末期の著名な植物学者小野蘭山にちなんで *Ranzania japonica* と発表します。矢田部良吉も同様なことに気づき、ロシアのマキシモヴィッチ (C.J. Maximowicz, 1827-1891) に標本を送ったところ、彼は *Yatabea japonica* と命名しました。結局、命名法に関する先取権により *Ranzania* が採用になりました。これを怒った矢田部は伊藤篤太郎を東京大学植物学教室へは禁足としましたので、この出来事は「破門草事件」として話題になりました。この時代、命名と植物に名前を残すことに人々の思いが特別であったことが伺えます。

そのほかの例としては、歴史的に著名な植物学者が属名に登場します。スイスの植物学者ゲスナー (Konrad Gesner, 1516-1565) にちなんでイワタバコ科ゲスネリア属 *Gesneria*、ドイツの植物学者フックス (Leonhart Fuchs, 1501-1566) にちなむアカバナ科フクシア属 *Fuchsia* 等々です。リンネはスイカズラ科リンネソウ (*Linnea borealis* Gronov.) に名を残しておりますが、高校生の時、残雪の北八ヶ岳横岳で初めて見たときには強い印象を受け、その記憶

は今でも残っています。なお、ケンペルはリンネ以前です。彼の命名になる植物はなく、リンネの使徒ツェンペリが命名したものが図鑑に見られます。ただし、ケンペルが日本への渡航の途次に当時のシャムで採集したバンウコンが *Kaempferia galanga* と名付けられていることは彼の功績を称えたことでしょう。

ところで、学名は重複することはあり得ないことは当然だと思います。ツツジ科アセビは *Pieris japonica* といいますが、文献をたどるうちモンシロチョウも *Pieris* を属名としていることを知りました。なぜ、このようなことが起こりえたかですが、動物と植物とは別なカテゴリーで扱われるので、このようなことが発生したのでしょうか。ちなみに *Pieris* とは、ギリシャ神話でそれほど著名ではない女神とのことです。

学名の変更も時に経験するところですが、分類群の整理により変更されることはしばしば経験するところです。最近の大きな変化は、ゲノム解析の結果の被子植物の系統を定めた APG III (Angiosperm Phylogenetic Group III) によるもので、ゲノム変化はいわば絶対的スケールですので、形態変化による系統関係に大きく変更をもたらしましたが、その詳細は別の機会に譲ります。

この様に見てくると、種小名はラテン語の形容詞ですから比較的たどりやすいかと思えます。格変化が伴うことを理解すれば比較的容易に理解できます。しかし、属名はさまざまな背景があり、統一して理解することは中々容易ではありません。多くの方が、同様な経験をされていると思いますが、学名攻略法の一例として筆者の経験を申しました。他の経験のある方はその例をお教えくださればと申して本稿を閉じます。なお、本稿に登場する植物写真はいずれも東京大学名誉教授邑田仁博士に提供いただいたものであり、邑田博士に謝意を表します。

文献

木村陽二郎 1983. ナチュラリストの系譜, 中公新書.
西村三郎 1989. リンネとその使徒たち, 人文書院.